

## DISC 2

アンドレア・バッケッティによる2つのプロジェクト  
マリオ・マルカリーニ

DISC 2は、アンドレア・バッケッティがソニー・ミュージックの2つのレーベル、ソニー・クラシカルとRCA Red Sealに継続している2つのプロジェクトのハイライト盤として、バッケッティ本人の要望も取り入れて、今回の日本盤のために特別にコンパイルしたものである。

バッケッティは早くから自分の演奏を録音することに関心を持ち、録音の機会があるとそれを最大限に利用するようにしてきた。CD化されたバッケッティの最も若い時期の演奏は、1996年、19歳でルツェルン音楽祭に出演し、ルドルフ・バウムガルトナー指揮ルツェルン祝祭合奏団と共演したモーツァルトのピアノ協奏曲第12番と思われる。1999年からは半ば自主制作に近い形でソロ・アルバムを制作し始め、2000年代に入ってからは、クレメンティの「グラドゥス・アド・バルナスム」全曲をArtsに録音して以降、イタリアのさまざまなレーベルからCDを発売するようになった。セッション録音のみならず、演奏会でライブ収録された音源も様々な形で世に出ている。

われわれソニー・ミュージックがバッケッティによるアルバムを初めて制作したのは2006年7月、ケルビーニが生涯で最初に出版したピアノ・ソナタ6曲を収録した時のことである。この時は国際ケルビーニ協会の全面的な協力を得て、自筆譜を始めとす

る原典資料を参照することが出来た。そしてそこから新たにバッケッティと私が編纂した楽譜に基づいて録音を行なうことで、ケルビーニという作曲家に新たな光が当たり、高い評価を得ることとなった。

これを契機とし、18世紀イタリアの作曲家のピアノ曲を、原典資料から新たに掘り起こして録音するというプロジェクトが始まった。翌2007年には第2弾としてガルツピのピアノ・ソナタ集、2010年には第3弾としてベネデット・マルチェッロのピアノ・ソナタ集、そして2012年には第4弾としてドメニコ・スカッラッティとソレルのソナタ集を録音してきたのである。バッケッティは私とともに、ヴェネツィアの国立マルチャーナ図書館(スカッラッティ、マルチェッロ)、ウーゴおよびオルガレーヴィ財団、ヴェネツィア音楽院図書館、ブラッシアのクラ・マレンツィオ音楽院、ポーロニャ博物館および音楽図書館(ガルツピ)などに保管されている作曲家の自筆譜やごく初期の筆写譜を広く渉猟し、そうした場所で発見した原典資料をもとにして録音を行なった。これら18世紀の鍵盤音楽は、バッケッティにとって秘められた宝のようなもので、その魅力を少しでも広く聴いてもらうべく、録音プロジェクトのみならず、演奏会においても、チマローザからルチアーノ・ベリオにいたるイタリアが生み出したピアノ曲のみで構成したプログラムを披露することもいとわれない。

この録音プロジェクトと並行して、われわれは、2011年から音楽家バッケッティにとって最も重要な作曲家であるヨハン・セバスティアン・バッハのクラヴィア作品の全曲録音プロジェクトを開始し

た。これが「バッハ・エディション」である。バッケッティはバッハの作品を何よりも愛してやまず、バッハが残した全てのクラヴィア作品を演奏し録音することが長年の夢であり、これまでもDeccaやDynamicといったレーベルにバッハ作品を録音してきたが、今回の「バッハ・エディション」では、オルガン曲を除くクラヴィア独奏曲の全てを網羅し、バッケッティのこれまでのバッハ演奏の総決算とするべく、強い意気込みでプロジェクトを進めている。

日本盤としての発売額とは異なるが、「バッハ・エディション」の第1弾は2011年3月に収録した「フランス組曲」全曲で、CD2枚組の余白には同時に収録したトッカータBWV914とバルティータ第2番を取めた。ちなみに当日本盤のDISC 2に収録されているフランス組曲第5番とトッカータBWV914は、この「バッハ・エディション」第1弾から選曲されたものである。

「バッハ・エディション」第2弾は当アルバムのDISC 1に相当する「イタリア様式のバッハ」で、2013年4月に収録された。今回バッケッティ初の日本盤として発売されるのはこちらである。

バッケッティによる「バッハ・エディション」はこの後、「ゴールドベルク変奏曲」(繰り返しと装飾を入れたヴァージョンとシンプルなヴァージョンの2種類の演奏を取めた2枚組になる予定)、ヴィヴァルティらイタリア人作曲家の作品の編曲を取めた「イタリア様式のバッハ第2集」、クラヴィア協奏曲全集、そして「イギリス組曲」全曲を、これからの3年間で収録・発売していく予定である。

個々の作品については細かく述べる紙幅がないため、ごく簡単な概説にとどめさせていただく。スカルラッチェ、マルチェッロ、ガルツピの作品については、私がそれぞれのオリジナル盤に詳細な解説を寄稿しているので、ご興味ある向きはそちらも参照されたい。

### J.S.バッハ:フランス組曲 第5番 ト長調 BWV816

バッハは6曲のフランス組曲を書いている。「フランス趣味で書かれていることからフランス組曲と呼ばれる」というフォルケルの記述以来、この名称で親しまれている。力強く壮大なイギリス組曲に対して、フランス的・ロココ的な優雅で親しみやすく洗練された音楽はこの名称に相応しい。作曲年代は1722年頃で、おそらく2度目の妻アンナ・マグダレーナへの結婚の贈り物として書かれた「クラヴィア小曲集」に、最初の5曲が含まれている。この第5番はバッハの組曲創作のひとつの頂点とも言うべき作品で、楽章間の性格的な対比が大きいうえに、各楽章が比較的長く、6つの組曲中で最大の規模となっている。定型のアルマンド、クーラント、サラバンドと続き、最後はジグで締めくくられる流れの中で、ガヴォット、プーレ、ルーレが挟み込まれている。

### トッカータ ホ短調 BWV914

トッカータとは、「触れる」「奏する」「弾く」などの意味を持つイタリア語のトッカーレに由来する技巧的・即興的な性格の強い楽曲を指す。バッハの7曲あるトッカータは、1710年代~20年代にかけての

アルンシュタットあるいはヴァイマル時代の若書きの作品である。自由な序奏の後、メランコリックな二重フーガ、半音階的な走句を披露するアダージョが続き、最後に長大な主題を持つフーガが締めくくられる。

### スカラルラッティ:

#### ソナタ 短調 K.174、ソナタ 長調 K.171

ナポリ派オペラの創始者であるアレッシンドロの息子としてナポリに生まれたドメニコ・スカラルラッティ(1685-1757)が残した550曲を超えるソナタの多くは、ポルトガル女王で後にスペイン女王となったマリア・バルバラのために書かれた。2部形式による単一楽章というシンプルな形の中に、無限とも思える多様な作風を詰め込んでいるのが特徴である。ここでは、同じアレグロの指定であっても、メランコリックに閉ざされたK.174、そして快活なK.171と、対照的な2曲が収録されている。

#### マルチェッロ:ソナタ 第3番 長調

ベネデット・マルチェッロ(1686-1739)は、兄のアレッシンドロと並んでヴェネツィア楽派を代表する作曲家。法律を学び、共和国議会のメンバーやブレーシャの財務官も歴任した人物である。声楽曲や宗教曲に優れた作品が多く、後期の協奏曲やシンフォニア、ソナタなどはヴィヴァルディの影響が濃い。

ト長調のソナタは、2楽章形式によっており、第1楽章では右手で執拗に繰り返される単音と、左手のシンプルな伴奏との対照が面白い。第2楽章ではメランコリックな雰囲気支配し、時折聞かれる単音

の繰り返し第1楽章との連関性を強調している。

#### ガルツピ:ソナタ 長調

バルダッサーレ・ガルツピ(1706-1785)は、マルチェッロについて作曲を学び、ヴェネツィアの養育院の楽長を務めた作曲家。さらにロンドンで台本作家のカルロ・ゴルドーニと組んでオペラ・ブッフアで成功を収めたことで名高い。

壮大で構成感のはっきりしたこのソナタは、輝かしい長調という調性によっており、三部形式による緩急2つの楽章からなる。第1楽章の表情豊かな主部は歌心に溢れ、オペラのアリアを思い起こさせる。中間部も主部の平穏な気分を引き継ぎ、主部が回帰する。第2楽章は目まぐるしい舞曲調であり、ヴィヴァルディの作風との類似性を指摘できよう。

**Mario Marcarini**

(訳:長澤規矩也)

[マリオ・マルカリーニは1971年ミラノ生まれ。大学時代に歌と音楽学を学ぶ。現イタリアのソニー・ミュージック・レーベル・マネージャーで、アンドレア・パヴェッティやパロク・アンサンブル「シレーテ・ヴェンティ」などの録音の制作を担当している。]